

## シンポジウム

# 近現代ヨーロッパ農村の習俗と政治

橋本伸也

かつてエリック・ホブズボウムは、その編著書『創られた伝統』の冒頭におかれた序論「伝統は創り出される」のなかで、次のように述べていた。

歴史家に関心を持つ中で、こうした意味での伝統の「創出」を経験していない時代や地域はおそらくはないだろう。しかしながら、それは「旧来の」伝統があてはまらない新たな伝統を生み出し、それに沿って「旧来の」伝統が案出された社会的型式を急激な社会変動が弱めるか、崩壊させるとき、あるいはそうした旧来の伝統とその制度的担い手や施行者がもはや十分な適応力や柔軟性を失ったと判明するか、さもなくばそれらが削除されるときに、最も頻繁に生じると考えるべきだろう。<sup>1</sup>

「伝統」なるものは、激しい根本的な社会変動のもとでこそもっとも頻繁に創造されるというわけである。しかもその際にホブズボウムが強調するのは、「慣習」行動と「伝統」との区別であり、力動的過程にある両者間の複雑な関係である。「農民（ペザント）運動」の研究者は知っている。『記憶されぬほど昔からの慣習』によって、ある共有地ないし共有権が村のものとして主張される場合、その多くは歴史的事実としてではなくて王侯や他の村に対する恒常的闘争における勢力均衡として表明されることを。<sup>2</sup>と言われるとおり、反復としての「慣習」自体が、個別具体的な葛藤の場面における恒常性と変化との関数として不断の運動過程にあるとともに、そうした変化が象徴的に形式化され儀礼化されたところに「伝統」は創造されるというのである。

2013年11月17日に行われたシンポジウム「近現代ヨーロッパ農村の習俗と政治」が目的としたのは、このような意味での慣習と民俗的な伝統（その両者にまたがるような意味で「習俗」の語は使用されている）が近現代のヨーロッパの農村において創造され再定義されるプロセスを、そのことの政治経済的な意味を参照しつつ捉えることであった。その際に舞台として選ばれたのは、18世紀後半から19世紀のイングランド、19世紀後半から前世紀転換期のボヘミア（現在のチェコ西部）、そしてナチズム期のド

イツである。空間的には西欧の島嶼部から大陸ヨーロッパの中東部、時間的には18世紀から20世紀中葉にいたる広く長い対比の軸を設定しつつ、農村的な慣習や伝統が社会の近代化過程でたんに姿を変えろというのにとどまらず、秩序の再編、再解釈による意味転換と再定義、さらにはシンボルの篡奪と異なる価値への転移などの複雑な過程を経ることを捉えようとしたのである。イングランド農村における近代的で資本主義的な所有観念の攻勢に適応した主体的でモラルエコノミー的な自己規律化過程としての「落ち穂拾い」の再編、ボヘミア農民の（身分制的「国民」概念とは異なる）近代国民化や政治主体化と農業の科学化に並進した民衆文化の国民文化への擬装的置換、ナチズム的な現代化過程における民俗としての収穫祭の政治的道具化や現代的テクノロジーとの結合など、このシンポジウムを通じてとりだされた諸局面は、近現代の農村の経験した矛盾に満ちた変容過程を鋭角的にえぐり出したものとなっている。かつ、一見対極的に見える近代イングランド農村社会の経験とボヘミアのそれとの双方の、屈曲をともなった延長線上に、ナチズム下の農村社会の姿を捉えることも可能なように思われる。農村や農民の主体／客体としての政治的動員過程に埋め込まれた「伝統的」習俗に着目するときに、今回のシンポジウムで取り上げられた三つの事例は、あるひとつのコロラリーをなしているのである。

「落ち穂拾い」という農民的慣習行動に着目して近代農村の秩序変容を捉えようとした大嶋渚氏（関西学院大学大学院生）の議論をより長期的で広域的な意味連関のなかに据え直すことを意図して組織したのが、今回のシンポジウムであった。こうした意図に応じて報告・寄稿して下さった桐生裕子氏（神戸女学院大学）、藤原辰史氏（京都大学）に心より感謝申し上げる。

〈註〉

- 1 エリック・ホブズボーム、テレンス・レンジャー編、前川啓治他訳『創られた伝統』紀伊國屋書店、1992年、14頁。
- 2 同前、11頁。